

第四資料室報告書

No.1 「三つの由来」

位置一致

重権説

高良山「三

検査報告: 表用道

検査報告: 209



第四資料室報告書 No.1 「三つの由来」

第四資料室という名称は、私が勝手にそう呼んでいるだけだ。

正式な部署名ではなく、旧庁舎西側の使われなくなった書庫の一角にある。ここには結論に至らなかった報告書と、照合途中の資料だけが集められている。午後になると西日が差し込み、書架の影がゆっくりと床を伸びていく。積まれた資料の端はわずかに反り、乾いた紙の匂いが残る。

ぼくの業務は、保存期限を過ぎた資料の整理と、廃棄の可否判断である。

ぼくは四十歳で独身、市内の 1LDK に一人で暮らしている。ただそこでは濃い木目の床に目立つ傷はなく、生活の痕跡が増えないよう、無意識に整えているのだと思う。ミニマリストかと言われれば、それほどでもないが、自分の痕跡は少ない方がいい人間だ。だから自然と物は少ない。

ソファとローテーブル、そして本棚があるだけだ。ただし本棚の三分の一は空けたままで、これからも埋める予定はない。食事は外で済ませることが多く、キッチンはほとんど使っていない。ちっぽけな冷蔵庫には水と無糖の缶コーヒーが数本あるくらいだ。

その代わりといっては何だが、駐車場には少しだけ金をかけている。

屋根付きで壁に近い区画に大枚を払う。お気に入りの愛車は月に最低二回は洗車し、内装は週に一度拭き上げる。エンジン音のわずかな違いにも気づく。

数字と機械は、曖昧さを残さない。そこには意味の揺らぎがない。

保存期限を過ぎた高良山の資料は、焼却候補の棚に移されていた。それでもぼくは、保管簿に挟まれた黄色い付箋に指を止めた。紙は少し古く、端が丸まっていた。

「位置一致」

それだけが書かれている。この資料の対象は年代も立場も目的も異なる三種だが、地図に落とすと三者は同じ一点を指す。

- ・江戸期の地誌写本で山中に「旧祭場あり」と記す。
- ・明治二十年代の社務記録で祭礼の順路を「内を避けて改む」と残す。
- ・昭和初期の聞き書きに「昔の神は、あそこに戻った」と語られている。

三種の要点を繋げると「旧祭場で避けられた内側で戻った場所」となる。呼び名も意味も揃わないが位置だけが揃っているのだ。通常、資料の一致は裏付けになるのだが、今回の一致は説明を補強していない。三つを重ねても由来は確定しないし、重なるのは地点だけだ。

それぞれ単体なら珍しい記述ではないが、地図に落とすと三者は同じ一点を指す。その点は縮尺を変えてもずれないし、重ねてもずれない。三種の要点を繋げると、「旧祭場で、避けられた内側で、戻った場所」となる。呼び名も意味も揃わないが、位置だけが揃う。

私は一度、縮尺を拡大した。

さらに拡大した。

それでも一点だった。

高良山までは車で往路四十七分だった。平日の日中、山麓の駐車場には私の車しかなかった。エンジンを切った直後、静寂が落ちが、その静けさは書庫の空気とよく似ていた。

本報告書は、難しい判断を抜きにして、この高良山にまつわる「三種の由来」を整理したものである。ぼくは疑問を整理して記録するのみだ。

以下、第一記録を記す。

第一記録：口承

今回の聞き取りは、事前に電話でアポを取った山麓の集落に居住する高齢者三名から得たものだ。彼らには互いに面識はなく、自宅での個別聴取であり、そこでは誰も同席させていない。いずれも七十代後半から八十代前半の男女だった。

一人目は、玄関先で応じた。仮名・昭夫（八十一歳）。

縁側のガラスは細かく曇り、長年拭かれた跡が波のように残っている。室内には仏壇の線香の匂いが薄く漂っており、テレビはついていたが、音は消されている。

昭夫は私の顔を一度見てから、山の方へ顎をしゃくった。

「山の奥はな……昔から入るもんじゃなかった」

そう言うと、湯のみを持ち上げ、冷めた茶を一口すすった。

「理由は？」と尋ねると、昭夫は少し笑った。

「理由ば知っとったら、入っとるたい。知らんけん、入らん。そげなもんや」

ぼくは地図を広げたが、昭夫は覗き込まず、視線を庭の柿の木に向けたままだ。

「ここですか」

ぼくが一点を指すと、昭夫はわずかに眉を動かした。

「……そこらへんやろな」

言い切らない。

「何があったのですか」

しばらく沈黙が続いた。風で軒の風鈴が鳴る。

第四資料室報告書 No.1 「三つの由来」

著者・制作：第四資料室

発行：2026 年 2 月
